

消えかかった灯火を消すことなく

〔聖書〕 イザヤ書 42 章 1～4 節

見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える者を。彼の上にわたしの霊は置かれ／彼は国々の裁きを導き出す。(口語訳:彼はもろもろの国びとに道をしめす) 彼は叫ばず、呼ばわらず、声を巷に響かせない。傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／裁きを導き出して、確かなものとする(口語訳:真実をもって道を示す)。暗くなることも、傷つき果てることもない／この地に裁きを置くときまでは。鳥々は彼の教えを待ち望む。(口語訳:彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教えを待ち望む)

〔序〕 見よ、わたしの僕

紀元前 1000 年にダビデが統一王朝をつくり、息子ソロモンの代に栄華の絶頂を極めたイスラエルも、南北に分裂し、紀元前 722 年に北王国がアッシリアに滅ぼされました。南王国もその 135 年後にバビロンに滅ぼされ、国王以下重だつた民はバビロンに連れ去られ、捕囚生活を余儀なくされました。ところがバビロンもペルシャに滅ぼされ、捕囚の民は帰国を許されます。このように変遷する歴史に生きるイザヤは、神からの大切な預言を数多く語りました。

その第一。「天よ聞け、地よ耳を傾けよ。主が語られる。——もし万軍の主がわたしたちのために、わずかでも生存者を残されなかったなら、わたしたちはソドムのようになり、ゴモラに似たものとなっていたであろう。わたしたちの神の教えに 耳を傾けよ」(1:9～10)。この神によって残された者の責任を、山下先生は語られました。

第二回目は、エッサイの株から萌え出た若枝、主を畏れ敬う霊に満たされた平和の王。正義と真実の裁きによってもたらされる、全被造物の世界にも及ぶ麗しい平和の出現です。「わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない」(11:9)。

先週の聖句は「見よ、あなたたちの神、見よ、主なる神、彼は力を帯びて来られ、御腕をもって統治される」(イザヤ 40:10)。榎本先生は「聖書は神の自己紹介の書です。聖書を読んで神がどのようなお方であるかを識り、絶望的な状況に立たされても、もう一度始めようとする、これが神が求めておられる私たちの生き方、信仰者の生です」と力強く語って下さいました。

今朝はイザヤ42章から、神の自己紹介の言葉を聞き取って参りましょう。第 1 節「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜び迎える 者を。彼の上にわたしの霊は置かれ／彼は国々の裁きを導き出す」。この節の後半は以前の口語訳では「わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道を示す」と訳されていました。「裁きを導き出す」よりも「道、(神の正しい道)を示す」の方が分かりやすいですね。

神はどのような僕を立てて、新しい神の支配を打ち立てようとするのでしょうか。今朝は特に3節の「傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする」という言葉に集中してお取次ぎしたいと思います。口語訳聖書では「傷ついた葦を折ることなく、ほの暗い灯心を消すことなく、真実をもって道を示す」と訳されていました。

[1] ラニエロを変えた灯火

先ずラーゲルレーブのキリスト伝説集にある「ともし火」をご紹介します。昔、イタリアのフィレンツェに、ラニエロという喧嘩大好きな暴れ者がいました。彼には好きで結婚したフランチェスカという奥さんがいましたが、彼の余りの乱暴さに我慢できなくなって、とうとう実家に逃げ帰ってしまいました。

ラニエロはあちこちの戦に参加しては、敵からぶんどった宝物を持ち帰っては、フィレンツェの聖堂のマリア像に捧げました。フランチェスカがそれを聞いて帰って来てくれたらと思ったからです。しかし彼がどんなに手柄を立てて宝物をマリア像に捧げても、彼女は戻って来てはくれませんでした。

ラニエロはとうとう十字軍に参加して、遠いユダヤのエルサレムにまで出かけて行き、大手柄を立てました。そして今度はキリストの墓の前にともる灯明から、自分の灯火に火を移す名誉を与えられました。ラニエロはこの灯火をフィレンツェの町に持ち帰る決心をしました。フランチェスカに見せたかったのです。でも灯火は、風の一吹きでフツと消えてしまいます。旅の途中で消さないように、よほど注意して持ち帰らなければなりません。

彼は馬の上に後ろ向きにまたがりました。前からの風に当たらないようにするためです。旅の途中で強盗に襲われましたが、それまでのように暴れ回ってやっつけることが出来ません。そんなことをしている間に、灯火が消えてしまうかもしれないからです。彼はじっと我慢してされるままになり、持ち物をみなはぎ取られてしまいました。彼は食べ物をめぐんでもらいながら、旅を続けました。

ボロの身なりでやせ馬に後ろ向きにまたがり、背中をまるめて灯火を大切に抱えて進む姿を見て、人々は馬鹿にしてからかいました。そんな恥をかかされたら、以前のラニエロなら怒り狂って相手を叩きのめしたことでしょう。でも灯火を守るために、ただただ我慢しなければなりません。こうしてラニエロはやっとフィレンツェに帰ってきました。

ところが人々は、その灯火が本当にエルサレムのキリスト様の墓から運んで来たものか、証拠を見せろというのです。彼は途方に暮れてしまいました。その時、一羽の鳥が聖堂の中に飛んできて灯火にぶつかりました。その衝撃で灯火はぱっと消えてしまいました。ラニエロはアッと息のみました。人々はどっと笑いました。ところが灯火がその鳥に燃え移り、その火でマリア像のローソクに火がともったのです。鳥は床に落ちて息が絶えました。笑った人々の心に感動が起こりました。「何と不思議な鳥だろう。私たちはこの灯火が確かにキリスト様のお墓からのものだと思える」。鳥が命を投げ出して、あかしを立ててくれたのでした。

消えやすい灯火を守るために、ラニエロは大変な苦勞を沢山味わいました。ところがそのつらい長旅が、ラニエロを全く別人に変えてくれたのです。彼はフランチェスカがどうして自分のもとを去ってしまったのか、どんなに手柄を立てても戻ってくれなかったのかも分かりました。ラニエロはフランチェスカの家に行って、優しく穏やかになった自分を見てもらいました。彼女が喜んで彼の元に戻ってきてくれたことは言うまでもありません。そして二人はとても幸せに暮したそうです。

[2] 灯火を消すことなく

暴れ者のラニエロを優しく穏やかな夫に変えた灯火は、イエス・キリストを表わしています。神の子イエス・キリストは、ベツレヘムという小さな田舎町の飼葉桶の中に寝かされている貧しく弱々しい乳飲み子というお姿で、この世に来られました。ヘロデ王が自分の王座が危うくなるのを恐れて、ベツレヘムとその一帯の 2 才以下の男の子を皆殺しにしました。その時には、夢に現れた天使のお告げを信じたヨセフが、素早くエジプトに逃げる決断をしたので守られました。神がこの世を救うために送られたイエス・キリストは、このように風の一吹きでフツと消えてしまうような心もとなさそのものに見えました。

またイエス・キリストのご生涯の最後は、十字架の上の死でした。武装した大勢の兵隊がゲツセマネの園で祈っているキリストに襲いかかりました。ペトロが剣を振るって戦おうとしましたら、「剣をさやに納めなさい。剣をとる者は皆剣で滅びる」とおっしゃって、自分から進んで捕らえられていき、弟子たちの命を守りました。

茨の冠をかぶせられ、十字架につけられて「自分を救え、自分を救え」とののしられました。でも水戸黄門のように、葵の紋章を取り出して「静まれ、静まれ！」と皆を平伏させませんでした。刑を執行する兵隊を含めて、全ての者の赦しを祈りつつ「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」と死んでいかれました。奇跡の数々をなさりながら、自分を守ることは一切なさらずに、貧しく弱々しいお姿で一貫されました。これが全世界の罪を贖う救い主だったのです。

今日の聖句をご覧ください。キリスト誕生 700 年前のイザヤの預言です。「傷ついた葦を折ることなく、暗くなっていく灯心を消すことなく、裁きを導き出して、確かなものとする。暗くなることも、傷つき果てることもない」（42:3～4）。

葦とはすぐに折れてしまう茎のもろい植物です。傷ついた葦というのですから、ちょっと触っただけでもダメになってしまう脆い状態をいうのでしょうか。暗くなっていく灯とは、まさに油もわずかとなり、光りも弱まり暗くなっていく灯火です。ちょっとした空気の動きでも消えてしまう弱々しい有様をいうのでしょうか。

「裁きを導き出して確かなものとする」とは「真実をもって神の正しい道を示し、打ち立てて行く」と言い換えてもよいでしょう。どのように不当な扱いを受けても、衰えたりくじけたりせず、優しさに徹し、脆く弱々しい者を大切にして、決してそこなわずに、正義を貫いていく——私はこの言葉に初め

て触れた時、大きなショックを受けました。

私は日本の軍国主義教育を受けて育ちました。敵の不義を打ち破り、正義を打ち立てていかなければならない。勝つために強い兵隊になれと厳しい鍛錬を受けました。戦争で 310 万人以上の日本人が命を失いましたが、正義の実現のためにはやむを得ない犠牲だと思いました。ところが日本の正義を貫くために、日本軍が殺したアジアの人々が 2000 万人以上もいたということ、戦争に負け た後で知ったのでした。

戦争による破壊と混乱の中で、私は生きる意義を求めてさまよい、聖書を手にするようになり、イエス・キリストと出会いました。この救い主の生涯は馬小屋に始まり、十字架で終わっています。弱々しい貧しさで一貫しています。でもそこにこそ「傷ついた葦を折ることなく、暗くなっていく灯心を消すこと なく、裁きを導き出して、確かなものとする」という預言通りの救い主の姿があったのでした。

正義とは敵を殺していく、厳しく恐ろしいものだと思っていました。しかしイエス・キリストは弱い者、脆い者を決してそこなうことなく、大切にしながら、真実をもって神の正しい道を現して下さいました。このお方こそ本当の 救い主だと、私は素直に納得できました。

[結] 優しく穏やかな平和を造りだすキリスト

強い人間を優しく穏やかな人間に変えるにはどうしたらよいのでしょうか。妻の優しい愛が必要だといわれます。でもフランチェスカは実家に逃げ帰ってしまいました。ところが神は、ふっと消えてしまう心もとない灯火となり、ラニエロの手の中にご自分を委ねて長い旅をさせることで、手におえない暴れ者を優しく心の低い人間へと造り変えてしまわれました。また一羽の鳥となり、わが身にともし火を燃え移させてマリア像のローソクをともし、ラニエロを疑う人々の心を変えてしまわれました。

力づくでは人を変えることはできないのです。正義も平和も力づくでは決してもたらされないのです。馬小屋の飼葉桶から十字架までの生涯をたどられたイエス・キリスト、最も弱い者・最も貧しい者に身を寄せ、一緒に生きてくださり、敵対する者の救いのために命を投げ出してくださった謙虚な愛だけが、この世界に優しく穏やかな平和を造り出していくのです。

皆さん、イエス・キリストを救い主と信じましょう。信じるとは、この方こそ自分を変え、世界を変えて下さるお方だとして、自分をそっくりその方の 手に委ねることです。

ラニエロは灯火となった神の僕を手の中にかかえて旅を続けました。彼と灯 火は一体になりました。そして彼と一体になった灯火が、彼を優しい穏やかな人に変えてくれたのです。灯火を持って旅を続けなければ、ラニエロは変わら なかったのです。また神の僕は旅の最後に小鳥となつてともし火をわが身に移 してマリア像のローソクを灯し、人々の疑いを変えて、ラニエロの願いを実現 させて下さいました。

私たちも、この神の僕イエス・キリストと一つに結ばれなければ、大きく変われません。信じるとは我と我が身をどうぞ宜しくと、すっかり委ねることです。信じてバプテスマを受ける時、聖霊が私たちに注がれます。聖霊が私たちをイエス・キリストと結びつけて、一体にしてください。

そしてイエス・キリストをあのように歩ませた神の愛の命が、私たちに与えられます。私たちの中にイエス・キリストの愛の命が働き始め、私たちは変えられていきます。イエス・キリストに似ていく自分になっていきます。何と嬉しいことでしょう。

ラニエロのようにイエス・キリストという灯火を大切に抱えて、人生の旅を続けましょう。イエス・キリストを信じ、イエス・キリストと一つになって人生を送っていきましょう。

お祈りします 神さま 天地万物を創造された全能の力をお持ちのあなたが、イエス・キリストという貧しいお姿で、歴史の中にご自身を現して下さいました。キリストは「私と父とは一つである」「私を見た者は天の父を見たのだ」とおっしゃいました。キリストは小さな者、弱い者、貧しい者に寄り添い、優しい手を差し伸べて、支え助けて下さいました。僕となられたあなたは、弱いともし火となり小鳥となってラニエロを守り導き、優しく穏やかな者に変えて下さいました。傷ついた葦を折ることなく、消えそうな灯火を消すことなく、あなたの正しい道へと私たちを導いて下さる優しい救い主イエス・キリストを感謝します。その愛を私たちにもお与えください。日々に御言葉を読み祈り礼拝を守り、この 11 月もあなたと共に生きる者にして下さい。御名によってお祈りします。 アーメン